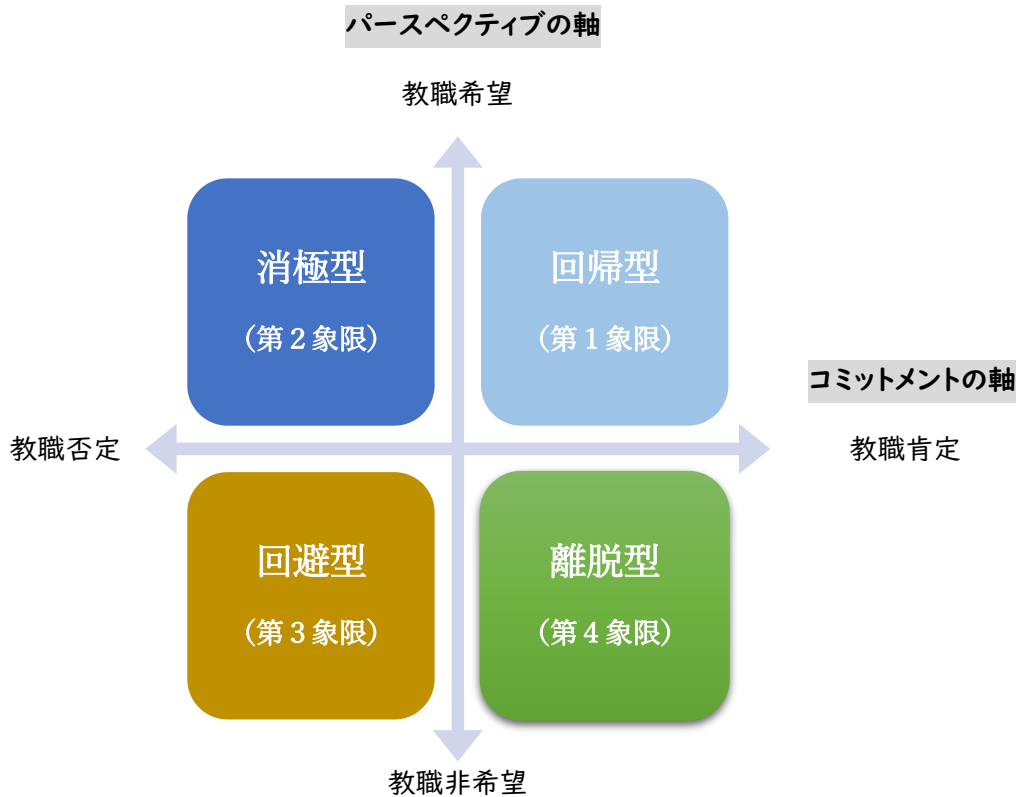


図1 教職との向き合い方



二つの軸は、現在の適応状況（コミットメントの軸）と将来展望（パースペクティブの軸）である。各ケースは、これら4つの象限（タイプ）のいずれかの位置にプロットできる。

第一軸（水平軸）は、教職に就くこと自体を積極的に価値づけているかどうかを示す。また、第二軸（垂直軸）は、将来にわたって、教職に戻っていく予定や見通しがあるかどうかである。両軸の交差によって4つの象限ができる。第1象限は、「回帰型」である。教職自体を価値づけていることには変わりなく、積極的な意味づけを行って現職を離職して教職に回帰する者である（中途採用）。他職の経験を肥やしにして教職に就くという点でいつの時代にもあり得た選択肢である。第2象限は、「消極型」である。他職でのマイナスの経験が意識されることで、より「マシな仕事」として消極的に教職へと流れるものである。成り手不足が極まってきたとき、この層が増える可能性がある。第3象限は、「回避型」である。種々の経験によって教職に就く価値を認めなくなり、将来的にも可能性を見出さないケースである。第4象限は、「離脱型」である。教職へのコミットメントは維持しているものの、何らかの理由により将来的にも教職に就く選択肢を見出さないケースである。

これら4類型のうち、とくに重要なターゲットとなるのは、「離脱型」である。後述するように、教職の現実を知ることによって教職を諦めたり距離を取ることを決断したりする者が非常に多く、かつ、一定の条件を満たすとき「回帰型」に変容する可能性を示唆しているから